

教材としての『伊勢物語』の可能性

国文学者 土方 洋一



1954年、広島県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程単位取得済中途退学。博士(文学)。青山学院大学名誉教授。専門は平安文学、物語論。著書に「源氏物語のテキスト生成論」(笠間書院)、『物語史の解析学』(風間書房)、『オトナのための古文再チャレンジ』(青簡舎)など。

『伊勢物語』の六段、通称「芥川」の段は、『言語文化』『古典探究』などにまたがって多くの教科書に採用されている定番教材である。難解な言い回しが少なく、ストーリーもわかりやすいため、初歩の古典教材として適していると考えられているからだろう。

この章段のみを教材にして、一つの単元の授業を行うことはもちろん可能なのだが、ここでは発展的な授業の一つの可能性として、『伊勢物語』という作品全体の中でこの章段をとらえる方向を考えてみたい。

「芥川」の段は、歌の後の後注的部分の記述によって、これが二条の后と呼ばれた藤原高子と、在原業平らしき「男」との恋物語であることが示唆されている(教材によっては後注的部分がカットされていることもあるが、それだと、『伊勢物語』における本来の意味づけとは違ってくる)。

「二条の后章段」と呼ばれている一連の章段は、三段から始まる。「男」が「懸想じける女」の許に「ひじき藻」と歌を贈ったという話で、歌の後の後注的部分に「二条の后の、まだ帝にもつかうまつり給はで、ただ人にておはしましける時のことなり」とあり、二条の后と在原業平らしき「男」との恋物語の発端として位置づけられている。これに続く四段から六段が、二条の后と「男」との悲劇的な恋の物語の中核

に当たることになる。

四段は、大后の宮の邸に住まっていた女の許へ男が通っていたが、やがて女は手の届かぬところへ去ってしまった(后妃として入内したことが暗示されているとされる)、男は嘆き悲しんで「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」という歌を詠んだという話である。

五段は、やはり男が女の許に通っていたが、それに気づいた「あるじ」が通り道に番人を置いたため、男は嘆いて「人しれぬ我が通ひ路の関守はよひよごとにも寝ななむ」という歌を詠んだ。それを聞いて女がひどく嘆いたため、やむなく「あるじ」は二人の仲を許したという話である。「二条の后に忍びてまゐりけるを、世の聞こえありければ、兄たちのまもらせ給ひけるとぞ」という後注的部分がついている。

それに続く六段がいわゆる「芥川」の段である。男が長年恋慕し続けてきた女を盗み出して逃げたが、「あばらなる蔵」に押し入れた女は鬼に食われてしまい、男は「白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消えなましものを」という歌を詠み嘆いたという話である。そして、この歌の後には、「これは、二条の后の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてあたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄、

堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈げろうにて内裏うちへ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それをかく鬼とはいふなり。まだいとわかつて、後のただにおはしましける時とや」という後注的部分があり、それによつてこの怪異説話は二条の後章段の一環として位置づけられることになる。

このように、『伊勢物語』の章段配列を見ると、男と二条の后らしき女とが密かに恋仲になつたという共通の発端を踏まえ、

四段Ⅱやがて女は入内して、二人の仲は引き裂かれた。

五段Ⅱひとたびは通い路を遮られたが、最後に二人の仲は許された。

六段Ⅱ男は女を奪つて逃げたが、女は鬼に食われてしまった(あるいは女を取り返された)。

という三通りの異なる結末が語られていることになる(成立の問題としては、四段、五段が先に成立しており、六段は後から付加されたことがほぼ明らかだが、授業の中では触れなくてもいいだろう)。しかも六段では、女が鬼に食われたというのは寓意で、実際には女の兄弟に連れ戻されたことをいうのだという種明かしのよな解説が加えられているので、一つの章段の中に更に複数のストーリーがあるともいえる。

更に面白いのは、少し後の十二段の存在であ

る。十二段は、男が人の娘を盗み出して「武蔵野」まで逃げていったが、ついに「国の守かみ」に捕まつたという話である。舞台が違うので別の話のようにも読めるが、同じ話型に即した話であり、六段の「異伝」と見ることもできる。『大鏡』では、藤原高子の許に在原業平が通つていたことを事実として取りなし、業平が高子をごっそり連れ出したのを、「御兄の君達、基経の大臣・国経の大納言などの……取り返しにおはしたりける折、(女が)『つまもこもれりわれもこもれり』とよみたまひたる」としている。六段と十二段とをごっちゃにしているというよりは、同じ出来事の語り替えだと見ているのだろう。

要するに、男と二条の后との恋物語は、共通の前提から出発しながら、いくつもの異なるストーリー、異なる結末を持ち、それらが独立した章段として平然と併置されているという不思議な構成になっているのである。歌物語という独特の形態を持つ物語であることが、このようなあり方を可能にしているのだろう。そして、このような形で千年以上もの間読み継がれてきたということは、「話が矛盾している」とか「いったいどれが本当なのかわからない」といったようなネガティブな受け止め方はされなかつたということの意味している。

このような『伊勢物語』の章段構成を説明し、『伊勢物語』の中では、「芥川」はいくつかの

「異伝」の中の一つに過ぎないのだということを生徒諸君に知ってもらうのも面白いのではないだろうか。

ここから先の授業の展開には、様々な可能性があると思う。一例としては、四段、五段、六段のどの結末が好きかを問うてみてもいいかもしれない。意見が分かれたら、それぞれの章段の魅力を述べ合う討論にもつていく。オリジナルの結末を考えてもらうのもいいかもしれない。物語のストーリーや結末をどのようにとらえるかは、それぞれの読者の性格や人生経験によつて変わる。討論の過程で、なぜ自分はこういうタイプの結末を好む生徒とは違う自分なりの理由があるのだという「気づき」があるかもしれない。そのような「気づき」が生まれるところに、単元の授業目標を定めることも可能だろう(それを「自己反省」に結びつけないように留意すべきである)。

現代文ならば、井伏鱒二の『山椒魚』の通行テキストと、作者自身が末尾の部分のカットした全集本との比較でも、同じような授業展開は可能かもしれない。そうした複数のストーリー展開、結末がありうるということを踏まえ、作品を読むことはストーリーを知ることの先にある創造的な行為であると実感してもらうことに意味があるのではないだろうか。